

茶室の天井構成と点前座・客座の関係について

今中愛子*・黒岩俊介**

(平成18年10月30日受理)

A study on the Ceiling Composition in Relation to the Seating Positions of the Host and the Guests in a Tea Room.

Kanako IMANAKA and Shunsuke KUROIWA

(Received Oct. 30, 2006)

Abstract

In a tea room, the locations of a *toko* (alcove), a *temaeza* (host's mat) and *kyakuza* (guests' mats) have been defined by the seating positions of the host and the guests, required by the manners of the tea ceremony.

In this paper, we examine the various relations between the ceiling composition and the seating positions of the participants at a tea ceremony, concerning the 38 extant tea rooms.

In conclusion, the *temaeza* and the *kyakuza* have played an important part in the selection of ceiling composition indispensable to the articulation of the interior space; the concept or philosophy of tea ceremony of the host, a tea master as well as an artist-architect, can be expressed in many ways of ceiling composition, among which the composition with 3 types of ceiling and the *temaeza* under an *ochitenjyou* (dropped ceiling) is the most eloquent.

Key Words: *temaeza*(host's mat), *kyakuza*(guest's mat), ceiling composition

1. はじめに

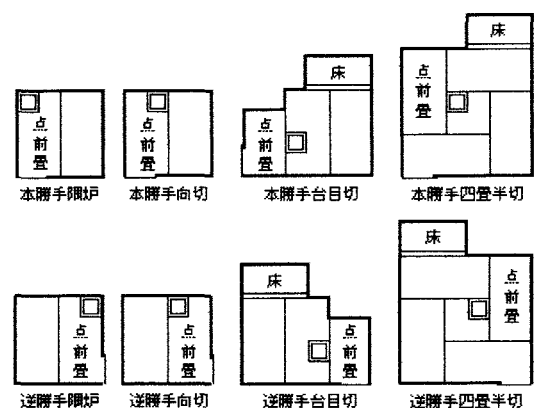
茶室において、茶道の作法が要求する亭主と客人の相対的な位置関係によって、床・点前座・客座の位置が決められてきた。また室内空間の分節に欠かせない天井構成の選択には、点前座と客座の位置が大きな役割を演じてきたと考えられる。

本研究は、現存する38の茶室¹を研究対象とし、点前座・客座との関係において天井構成を考察することを目的とする。

2. 点前座・炉・勝手・床・入口について

2-1 点前座

点前座は、亭主が点前をする点前量と、それに進むた



めの踏込畳を含めた亭主の座のことで、点前座がなければ「茶」は成り立たない。

* 広島工業大学環境学研究科地域環境科学専攻

** 広島工業大学環境学部環境デザイン学科

2-2 炉

客座と点前座をつなぐ役割をするのが炉である。炉の切り方には、入炉と出炉がある。出炉とは点前座に接する畳に炉を切る方法で、四畳半切と台目切がある。入炉とは点前畳に炉を切る方法で、客畳に寄せて切る炉を向炉、客畳と反対の方向に切る炉を隅炉という。以上の4通りの炉の切り方に、おのおの本勝手と逆勝手があり、合わせて8通りの炉の切り方がある。

2-3 勝手

右勝手とは、点前座の右側に客が座る席構えのことを言い、本勝手とも言われる。左勝手とは、茶席において点前座の左方に客が着座する場合をいい、逆勝手とも言われている。勝手付とは、点前座において、亭主から見て勝手（水屋）側のことをいう。

2-4 床

室床は、床の間内部の壁と天井を土で塗り、それぞれの入隅の部分に丸みをつけて塗り回した床の間の形式である。こうすることにより奥行きなど、床の間の空間の具体性を消し去り、そこに心的に自由な広がりを感じさせ、求道的な佗空間を演出する。この形式はおそらく利休によって創始されたものであろうと考えられている。

蹴込床は、蹴込板を用いて座敷面より一段高くした床の間の形式で蹴込板の代わりに丸太や竹をはめ込む場合もある。床框を省略した板床の形式が多いが、蹴込板の上に床框を設置し、畳を敷いた形式もある。

踏込床は、床框が略され、地板が座敷の畳面と同じ高さになったものであり、「ふんごみ床」「ふんごみ」あるいは「敷込床」「踏床」とも言われる。

亭主床は、茶室の床の構え方で、点前座の勝手付（客とは反対側）に床の間を設けたもので、床の間は客の側にくるのが一般的であるが、これは自由な発想より生まれたものである。床の間は、その位置によって座敷の上下関係を定める役割を持つが、この場合その意味は薄らぎ客から亭主側を見たとき、亭主の点前を演出するという新たな役割を担うようになる。

出床は、一般に床の間は壁の中の窪んだ部分として表現されることが多いが、それに対して、出床は室内に張り出す格好となる。

下座床は、茶室における床の構え方で、その位置による名称である。この場合の下というのは、点前座に着座した亭主から見た時の床の間の位置によるものであり。この位置関係により茶室の使い勝手が大きく違ってくる。点前座から見て、後方に構える形式のことを言う。

台目床は、大きさによる名称で、床の間の間口の大きさ

が台目畳の長辺方向の寸法であり、奥行きが間口方向の寸法とのバランスにより台目畳の短辺方向の寸法よりも小さくなる床のことである。

一間床は、間口が一間の大きさの床の間のことで一般に四畳半以上の大きさの書院座敷に用いられる。

枱床は、平面がちょうど半間四方の大きさを方形となる床である。「板床」で「踏込床」の形式をとるものも多く見られるが、「畳床」や「框床」の形式のものもある。

壁床は、床と言う特別なスペースを設けるのではなく、客座の壁に直接掛け軸などをかけ床として使用するものである。

上段床は、貴人の座る特別な一段上がるところの壁に掛け軸などをかける床である。

2-5 入口

躡口は、高さ2尺3寸（約69cm）、幅2尺2寸（約66cm）ほどの、一人一人がやっとくぐって入ることの出来る小さな出入口である。極端に小さな茶室空間も、この小さな入口をくぐることにより高さや広がりを感じることができ、入席後は壁のような存在になるので窓からの光の効果を妨げない。ちょうど雨戸を切り縮めたような形で、外側は2枚半張りの板、内側には框や棧が露出したつくりになっている。

貴人口は、躡口に対して、二枚障子の通例の出入口である。小間では低い程つり合いがいいので、通常よりはかなり低い寸法でつくられ、腰付き障子が立てられる。

2-6 天井

天井の「つくり」の種類は、構成的には以下のA～Gの7種類、使用される材によるとa～cの3種類に分類される。なお、各記号は「3. 天井構成」の図で使用される。

・A 平天井

天井面を水平につくった天井の総称。最も事例の多い天井。

・B 化粧屋根裏

平らな天井を張らず、屋根裏の構成を室内に見せる形式。斜面が加わることによって室内に高さをつくり出す。垂木の上に木舞を配列し裏板が張られるという屋根裏を天井に見立てたものであるが、材も構成もきれいに整えてある。

・C 落天井

天井の断面が2段となっている場合の低い方の天井をいう。

・D 掛込天井

一つの部屋の中に平天井と勾配天井を組み合わせた形態。空間を主と従に区分する意図がある。

・E 折上天井

壁上端の回縁より曲面等で天井面を高くしたもの。また、天井の中央部を支輪（曲面等で高くすること）や、蛇腹で高くすることを折上という。折上天井と二重折上天井があり、天井面の仕上げは通常、格天井が用いられ折上格天井、折上組入天井、二重折上小組天井の種類がある。

・F 格天井

格縁を格子に組み、正方形の鏡板をはめ込んだ天井で、寺や城、旅館建築の皇族が宿泊する部屋や、大広間でよくつかわれている。

・G 竿縁天井

一般に部屋の入口から木端が見えるように貼ってある。また、竿縁は、床差し（床の間に竿縁が刺さったように見える、床の間に直角に竿が出ている状態）を嫌うため、床の間と平行に掛けられる。天井を長手に継ぐときは、空が連続して見えるように心がけられている。

・a 網代天井

杉や榎、檜あるいは竹などを斜めに編んだものを張った天井。へぎ板の幅や編む角度によっていろいろな意匠効果が出る。

・b 蒲天井

蒲を蓆状に編んで張り上げた天井。

・c 野根板

高知県東部の野根山産の木材を薄くはいた長い板。

3. 天井構成

点前座と客座の天井を、Ⅰは点前座と客座で天井が区別されていないもの、Ⅱは点前座と客座で天井が区別されているもの、Ⅲは未確認のグループに大別し、用いられている天井の種類数により細分類する。すなわち、①は1種類、②は2種類、③は3種類である。なお、図中の▲は亭主の位置と向き、△は客の位置と向きである。方位は北を上にする。したがって、この軸からの振れは図の傾きに対応する。

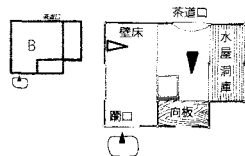
Ⅰ. 点前座と客座で天井が区別されていない

Ⅰ-① 天井が1種類

・裏千家今日庵

一畳台目で向板を合わせて二畳の中に床も水屋もすべて取り入れた空間で成り立っている。

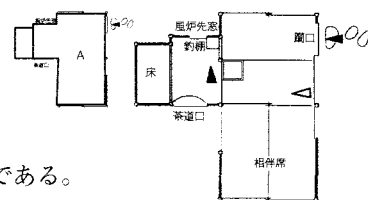
そのわずか二畳敷きの広さが竹垂木・竹小舞の化粧屋根裏に蔽われている。炉は向切で、台目構えではない。むしろここが床の代わりなのかもしれない。



・慈光院高林庵

二畳台目の席であるが、二畳の間との境界は二枚の引違襖になっており、襖を外してここを相伴席とすれば四畳台

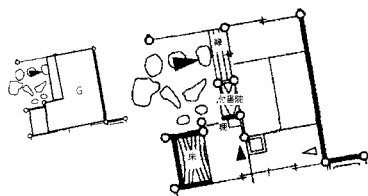
目になる。床は客座からは最も遠く、点前座の勝手付に位置する、いわゆる亭主床の構えである。全面が平天井である。



・西芳寺湘南亭

長四畳に台目の点前座を付属し、中柱を立てて炉は台目切になっている。

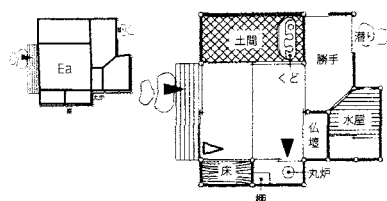
床は点前座の勝手付に配置され亭主床とされている。上がり口は躡口ではなく付書院と同様の腰障子二枚を引き違いにした貴人口形式になっている。



・松花堂

二畳の間がいわば茶室で右に床を設け左に丸炉が切られている。天井

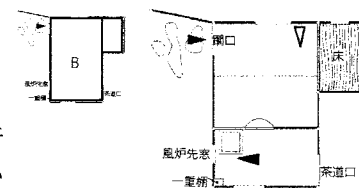
は折上天井で、周囲は板張りだが、中央は鏡板ではなく竹の網代張りである。



・西翁院澱看席

三畳で、炉は向切で、床は室床である。天井が総屋根裏になってい

るために、床の落掛上の小壁がきわめて高くなる。

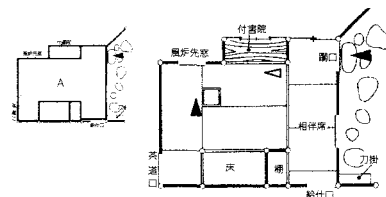


・西本願寺飛雲閣憶昔席

三畳半で、躡口から入ったところに相持席の板間を付けている。

炉は本勝手で台目に切られている。

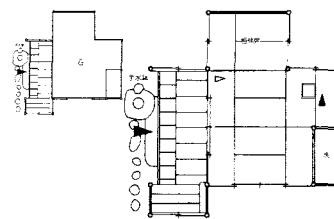
床が座敷のほぼ中央に位置するのは珍しい。三畳の座敷を上段に見立てているのも特徴である。全面が平天井になっている。



・孤蓬庵忘筌

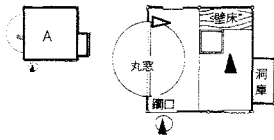
十一畳に一畳の点前座を付けた広さで、八畳に三畳の相伴席を添えた間取りになっている。また

貼付の間床がある。炉は、いま四畳半切であるが、もとは台目切であつたらしい。前面が棹縁天井になっている。



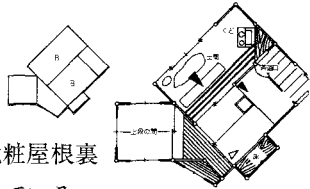
・高台寺遺芳庵

一畳台目に向板を入れ、床はなく、向板の前の壁に軸物を掛ける(壁床)。天井全面が竹でできた平天井になっている。



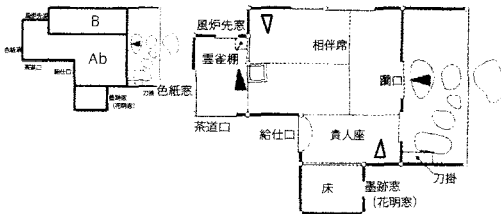
・金閣寺夕佳亭

三畳敷きで正面に床を設けている。炉は四畳半切で、土間天井の急勾配をもった化粧屋根裏が、空間のゆとりを作り出している。



I-② 天井が2種類

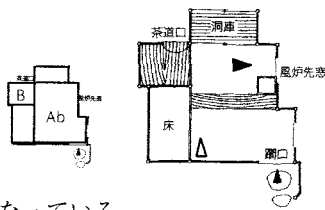
・奈良八窓庵



四畳台目で折れ曲がった間取りになっている。すなわち横長の三畳台目に一畳の貴人座が付いており、中央寄りにあけられた躰口を入ると左に台目床があり、そこが貴人座で右が相伴席になる。床の右矩折りに右に寄せて給仕口があけられている。点前座は台目畳で中柱を立て、炉は台目切、床は下座床になっている。天井は、床前から点前座にかけて蒲平天井で、それが中柱の通りで打ち切られ、残りを化粧屋根裏としている。

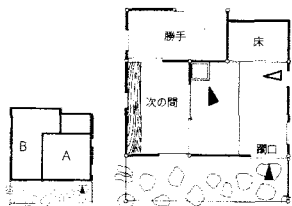
・武者小路千家官休庵

一畳台目の点前座との間に幅五・一寸の半板を入れている。炉は向切で下座床、天井は蒲平天井、床脇の上だけ化粧屋根裏になっている。



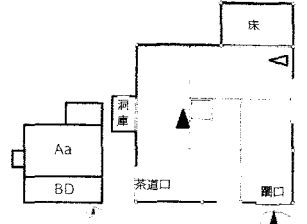
・妙喜庵待庵

二畳隅炉室床付きの茶室と、次の間(一畳板畳付き)・勝手(一畳)から成り立っている。茶室としては極限の狭さであると言われており、その狭さは亭主と客との膝が触れ合うほどである。天井は竹垂木の化粧屋根裏になっている。少し大きめの躰口が設けられているが茶室に躰口が設けられたのは待庵がはじめてである。

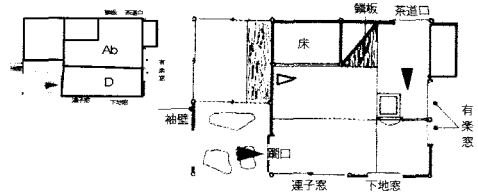


・裏千家又隠

四畳半で、躰口の正面に床を構える。天井は低くややうす暗い空間となっている。天井は、床前から点前座にかけて三畳分が網代の平天井、躰口より一間半が化粧屋根裏である。



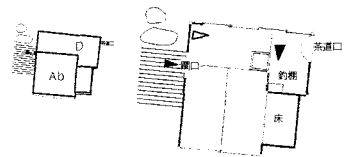
・如庵



二畳半台目の点前座に炉を向切にしている。炉先に中柱を立てて板をはめている。天井に関しては、床前から点前座にかけて蒲平天井、残りの躰口から風炉先にはめられた板より南側までは掛込天井となっている。

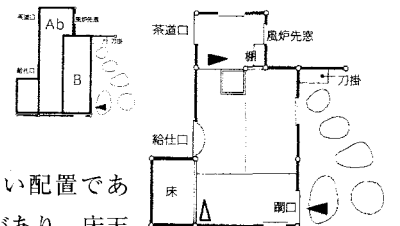
・金地院八窓席

三畳台目の席で、台目畳と並んで西向きの床がある。普通隅にあけられる躰口がここでは中央寄りにあけられている。その躰口を入ると中央に畳の縁が走っており、調度この位置で、天井は北側が掛込、東側が蒲平天井になっている。



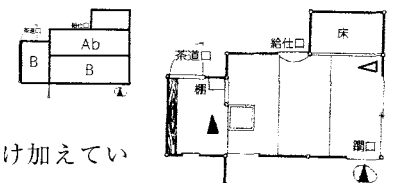
・曼殊院八窓軒

三畳台目、中柱付台目切で、茶道口と給仕口とが一つの壁面に並んでいる珍しい配置である。躰口の正面に床があり、床天井が非常に高い。天井は、床前が蒲平天井、躰口側が化粧屋根裏になっているが平天井がそのまま点前座の上まで伸びて、落天井にはなっていない。



・表千家不審庵

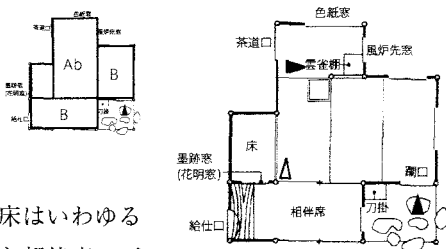
平三畳台目で、点前座が台目で、それに幅5寸の板畳を付け加えている。躰口の真向かいに床が設けられている。天井は床側の蒲天井、躰口側と点前座は化粧屋根裏で構成されている。炉は台目切で、風炉の時は、切られる畳を点前座に使う習慣になっている。



・藪内家燕庵

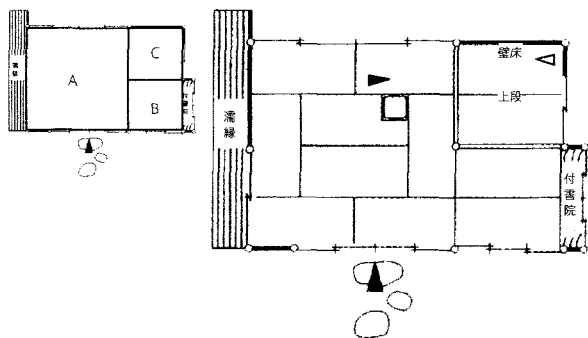
三畳台目に間仕切りを隔てて相伴席が付いている。

炉は台目切で、床はいわゆる下地床で、下座と相伴席の天井は化粧屋根裏で他は蒲平天井となっている。



I-③ 天井が3種類

・表千家残月亭

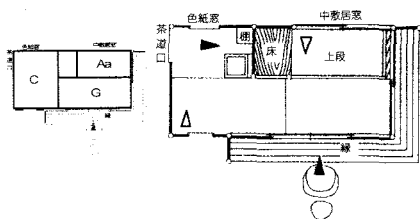


十畳敷きに二畳の上段を設け、付書院を備えている。上段は床として使われるので、この形式を「上段床」または「残月床」ともいう。天井は上段上が落天井、付書院前が化粧屋根裏、残りが平天井で構成されている。

・等持院清漣亭

長四畳の広さで、炉が向切になっている。躰口はないが貴人座(上段)を重視した貴人中心の構成となっている。

上段が網代天井、点前とその前の台目が落天井、残りが竿縁天井で構成されている。

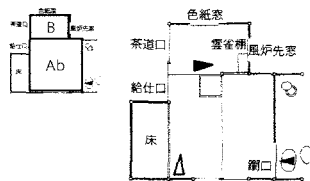


II. 点前座と客座で天井が区別されている

II-② 天井が2種類

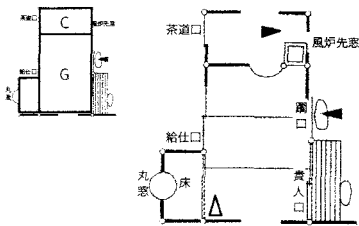
・八窓庵 (旧舎那院忘筌)

二畳台目の小間で、炉は台目構えで出炉、躰口を入った正面に台目床があり、その床脇が茶道口となる。天井は床前から点前座までが蒲平天井、点前座は化粧屋根裏となっている。



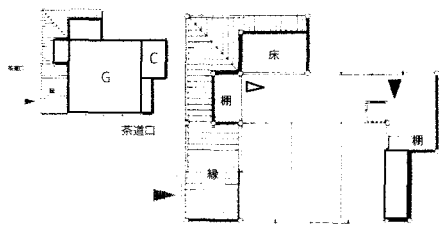
・西行庵皆如庵

点前座一畳と客座三畳から成る。炉は向切で、客座の天井は一面の竿縁天井で、点前座の上は落天井である。床は板敷きの框床で、入隅を天井まで塗り回した室床で、正面に円窓をあげている。



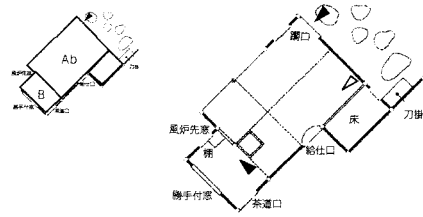
・龍光院密庵

四畳半台目で、炉は台目切である。床の隣はもとは給仕口、点前座に茶道口があげられていたと考えられる。点前座の天井は落天井で残りは竿縁天井である。



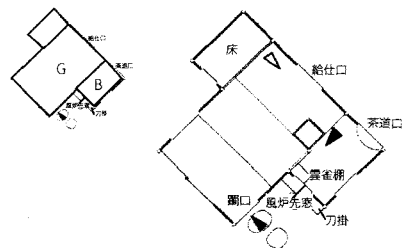
・桂離宮松琴亭

三畳台目で奥に点前座が設けられている。点前座は台目構えで雑木の皮付の中柱で鋸を入れて曲がりをつけている。点前座天井は化粧屋根裏で残りは竿縁天井である。



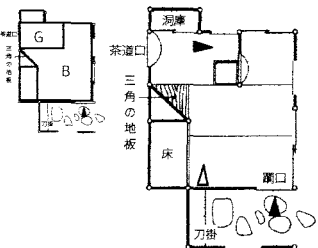
・春草庵

三畳台目、床と点前座とが向かい合って配置されている。奥の壁面には二本襖の給仕口を開いている。点前座は落天井で、客座が竿縁天井になっている。



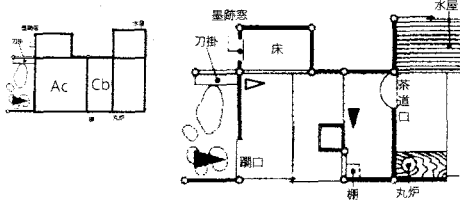
・仁和寺遼廓亭

二畳半台目の広さで躰口の左手に床を配置しているが、その脇に三角の地板を入れて点前畳を広くする工夫をしている。手前座は棹縁天井で、残りは化粧屋根裏で構成されている。



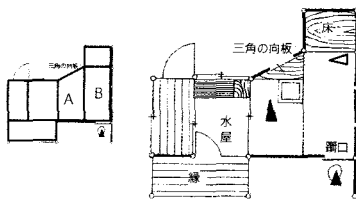
・聚光院閑隠席

水屋を中に東西に位置している。閑隠席は、三畳敷きで、点前座に中柱を立て、炬を上げ台目に切っている。天井は野根板張り白竹打ち上げ平天井で、点前座のみ蒲落天井にしている。一方、拵床席は、入口を貴人口形式にし、内部は四畳半の西北に半畳つまり方形の踏込床を設けている。このような床を拵床という。



・角屋清隠齋

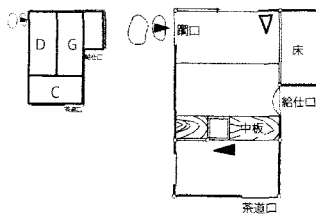
一畳台目向板入で、躰口の正面に床が構えられているが、框のない踏込床である。天井は点前座が平天井で客座が化粧屋根裏になっている。



II-③ 天井が3種類

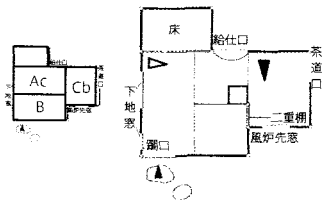
・玉林院簞庵

二畳の客座と一畳の点前座とのあいだに、幅一尺四寸の中板を入れ、その中に上げ台目切に炬を切っている。天井に関しては、手前側にある亭主畳の上部は落天井、右奥の床の間の前は板張りの竿縁天井、客畳は掛込天井となっており「真行草」の変化を見せている。



・堀内家長生庵

二畳台目で台目構え、躰口の正面に床がある。天井は、野根板平天井、蒲落天井、化粧居屋根裏の三段階の構成になっている。



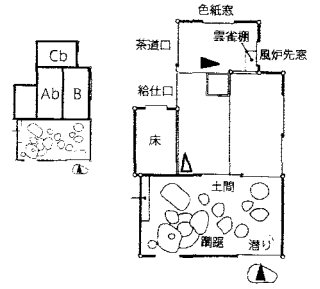
・高桐院松向軒

二畳台目で下座床、そして躰口の左に床があり向き合っていない。天井は床前が野根板平天井、点前座が蒲落天井、残りが化粧屋根裏と変化をつける。



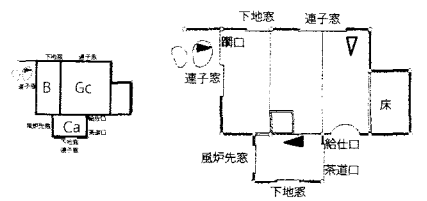
・真珠庵庭玉軒

二畳台目、炬は台目切で、入口が貴人口になっている。天井は、床前が蒲天井、点前座が同じく蒲落天井、客座の一畳分が化粧屋根裏になっている。しかし、もとは、すべて化粧屋根裏で蒲天井は後に張られたものである。



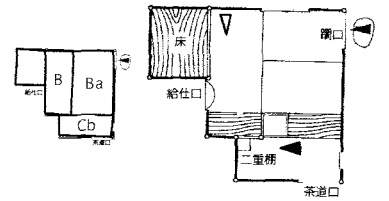
・旧慈眼院六窓庵

三畳台目で、客座三畳の中央に台目の点前座が配置されている。炬は台目切で、茶室口と矩折りに給仕口をあけている。天井は床前二畳が野根板の竿縁天井、点前座は網代落天井、躰口寄りが化粧屋根裏と変化をつけている。



・久田家半床庵

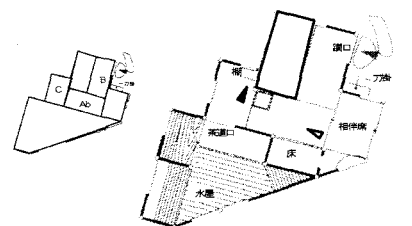
床前に一畳、客座に台目二畳、そして点前座に一畳敷き、客座と点前座の間に中板を入れ、そこに炬を切って中柱を立て台目構えにしている。天井は、点前座が蒲落天井。客座は一畳が網代天井で、ほかは化粧屋根裏となっている。



・浄土寺露滴庵

客畳三畳の奥に床が設置され、右側に茶室口を設け、左側に相伴席が設けられている。点前座は台目構えで、相伴席との間には引き違いで太鼓襖を設置してある。

水屋との間は屈折して接続しているので床畳の部分斜めに切りとられているが、これは本来の形ではなく浄土寺に移築された時地勢に合わせたものである。



Ⅲ. 天井は区別されているが未確認

天然図画亭の天井構成は今のところ未確認である。

浄土寺露滴庵, 伏見稲荷大社御茶屋, 水無瀬神宮灯心亭,

表 1

茶室名	天井形式	茶道使用畳 ²	点前座 ³	炬 ⁴	勝手	床 ⁵	天井				
							点	客座		床	他
								上座	下座		
西芳寺湘南亭	I-①	長四台	台	台	右	亭	G	G		G	
松花堂	I-①	二	一	丸	右	出	Ea	Ea		Ea	
慈光院高林庵	I-①	四台	台	台	右	亭	A	A		A	A(相伴席)
西翁院澱看席	I-①	三	一	向	右	円	B	B		B	
西本願寺飛雲閣憶昔席	I-①	三半	一	台	右	出	A	A		A	A(相伴席)
孤蓬庵忘筌	I-①	十二	一	四	左	一	G	G		G	G(相伴席)
裏千家今日庵	I-①	一台+向板	台	向	右	壁	B	B		B	
高台寺遺芳庵	I-①	一台向板	台	向	左	壁	A	A		A	
金閣寺夕佳亭	I-①	三	一	四	右	室	B	B		B	
妙喜庵待庵	I-②	二	一	隅	右	室	A	A	A	A	B(次間・勝手)
奈良八窓庵	I-②	四台	台	台	右	台	Ab	B	Ab	Ab	
如庵	I-②	二半台	一	向	右	蹴	Ab	Ab	D	Ab	
金地院八窓席	I-②	三台	一	向	右	蹴	D	D	Ab	Ab	
曼殊院八窓軒	I-②	三台	台	台	右	台	Ab	Ab	B	B	
裏千家又隠	I-②	四半	一	四	右	台	Aa	Aa	B+D	Aa	
藪内家燕庵	I-②	四台	台	台	右	蹴(下)	Ab	Ab	B	Ab	
表千家不審庵	I-②	三台	台	台	右	室	B	Ab	B	Ab	
武者小路千家官休庵	I-②	一台半板	台	向	右	室	Ab	Ab	Ab	Ab	B(床脇)
等持院清漣亭	I-③	二(長畳)台-(上段)	台	向	右	踏	C	Aa	C+G	a	a(上段)
表千家残月亭	I-③	十+二(上段)	一	四	右	上	A	C	A B	C	C(上段)
龍光院密庵	II-②	四半台	台	台	右	蹴+書	C	G		G	
桂離宮松琴亭	II-②	三台	台	台	右	室	B	Ab		Ab	
八窓庵(旧舎那院忘筌)	II-②	二台	台	台	右	台	B	Ab		Ab	
春草廬	II-②	三台	台	台	右	台	B	G		G	
仁和寺遼廓亭	II-②	二半台	台	向	右	出	G	B		B	
聚光院閑隱席	II-②	三	一	台	右(両方)	蹴	Cb	Ac		Ac	
西行庵皆如庵	II-②	四	一	向	右	室	C	G		G	
角屋清隠齋	II-②	一台向板	台	向	右	踏	A	B		B	
高桐院松向軒	II-③	二台	一	向	右	下	Cb	Ac	B	Ac	
玉林院簔庵	II-③	三半板	台	台	右	台	C	G	D	G	
真珠庵庭玉軒	II-③	二台	台	台	右	台	Cb	Ab	B	Ab	
旧慈眼院六窓庵	II-③	三台	台	台	右	台	Ca	Gc	B	Gc	
堀内家長生庵	II-③	二台	台	台	右	台	Cb	Ac	B	Ac	
久田家半床庵	II-③	二二台中板	一	四	右	蹴	Cb	B	Ba	Ba	
浄土寺露滴庵	II-③	三台	台	台	右	蹴	C	Ab	B	Ab	
伏見稲荷大社御茶屋	III	七	一	向	右	出					C(床脇)
水無瀬神宮灯心亭	III	三台	一	隅	右	蹴		F		F	
天然図画亭	III	八台	台	向	左	一	B				

4. 天井構成と点前座・客座の関係について

I-①は、1種類の天井しかないので、天井構成は点前座、客座とは無関係である。

I-②は、点前座と上客座（客座の上座）の天井が同じものが63%、点前座と下客座（客座の下座）の天井が同じものが27%である。すなわち、点前座と客座が区別されていないときは、点前座と上客座の天井を同じにして、客座を上座と下座に分ける傾向がある。点前座と床前畳の天井が同じものが55%、上客座と床前畳の天井が同じものが72%である。このことから、上客座はたいてい床前に配置されることがわかる。

I-③は、上客座が上段になっており、上客座自体が上座床になるか、あるいは床前に配置されるため、上客座と床前畳の天井が同じなのである。

II-②は、点前座の天井だけが100%独立して別の天井であり、客座は上客座と下客座の天井が100%同じである。このことから、この分類では客座に関しては区別をつけず点前座だけを特別なものとしていることがわかる。

II-③は、II-②と同様に点前座を区別しており、それに加えて客座が上客座と下客座で100%天井が異なるものになっている。上客座に関しては床前の天井と100%同じことから床前が上客座の位置であることがわかる。

次に、表1より、対象茶室の天井構成を全体として分析すると、規則性はないが点前座の天井は29%が落天井、21%が化粧屋根裏、18%が平天井である。

落天井が比較的割合が高いのは、客座から点前座を見た場合、少し天井が他の天井よりも低いことによって点前座の空間が同じ茶室の中であっても異なるものに見え、点前をしている亭主が引き立ってみえるからであろう。

天井が1～2種類の場合、点前座は42%が平天井で、3種類の場合は88%が落天井である。このことから、天井の種類を増やすことによって点前座と客座の天井をより明確に区別することができるようになり、点前座が落天井の下に位置づけられるようになることがわかる。

上客座は45%が平天井で18%が化粧屋根裏、下客座は32%が平天井で42%が化粧屋根裏という結果である。このことから貴人座あるいは上客座には平天井を使用し、下客座には化粧屋根裏を使用する傾向があることがわかる。

床前畳の天井は45%が平天井で18%が化粧屋根裏という結果である。このことから、床前畳はほぼ上客座である。

5. ま と め

亭主が茶人であり建築家であり芸術家でもあった時代、亭主の造る茶室には細部にわたり工夫がこらされており、客に対する配慮や亭主の拘りが天井構成に組み込まれていることが伺える。それはとりわけ、天井が3種類で点前座が落天井である場合によく表されている。

参 考 文 献

- ・中村昌生：茶室の研究～六茶匠の作風を中心に～，河原書店，2000年
- ・前久夫：茶室の見かた，東京美術出版，2002年
- ・日向進：茶室に学ぶ～日本建築の粋～，談交社，2002年
- ・西和夫：京都で建築に出会う～見るおもしろさ，知る楽しさ～，彰国社刊，2005年
- ・船越徹／熊倉功夫／中村利則／西和夫：茶室空間入門，彰国社，1992年
- ・<http://www.ucatv.ne.jp/~shuumei/cyanoyu/cyasitu.htm>
- ・<http://www.tcn-catv.ne.jp/~HATTORI-KENSETU/page3.htm>
- ・<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~city-c/tearoom04.html>
- ・<http://www.aba-osakafu.or.jp/josei/toushin.htm>
- ・<http://w2352.nsk.ne.jp/himeno/museum/museum022-3-11.htm>
- ・<http://www002.upp.so-net.ne.jp/viviplan/toko.html>

注

- 1 平面図は、前久夫：前掲書にもとづいたものである。
- 2 長四台：長畳四畳台目，二：二畳，四台：四畳台目，三：三畳，三半：三畳半，十二：十二畳，一台向板：一畳台目向板，四：四畳，二半台：二畳半台目，三台：三畳台目，四半：四畳半，一台半板：一畳台目半板，二（長畳）台一（上段）：長二畳台目一畳上段，十＋二（上段）：十畳＋二畳上段，四半台：四畳半台目，二台：二畳台目，四：四畳，三半板：三畳半板，二二台中板：二畳二台目中板，七：七畳，八台：八畳台目
- 3 台：台目，一：一畳
- 4 台：台目切り，丸：丸炉，向：向切り，四：四畳半切り，隅：隅炉
- 5 亭：亭主床，出：出床，室：室床，一：一畳床，壁：壁床，台：台目床，蹴：蹴込床，下：下座床，踏：踏込床，上：上座床，書：書院床